保育者になったころ(4)

最初に育てていただいたこと

藤野敬子

保育者になったいきさつ

私は一九三二年に小学校に入学しましたが、そのころ、松山にも婦人の友の生活合理化展覧会が開催され、連日手伝っていた母親と共に自由学園の卒業生のきびきびした働きに接し、会場で上映されていた自由学園の映画を観ました。自分たちで校門を開けて一日を始める姿が忘れられず、その後、羽仁もと子や羽仁説子のものを読み影響を受けましたが、直接保育者をめざしたのは、松山東雲高等女学校の教育の時間に、清原峰規先生が育児の営みの素晴らしさを語られた時です。

当時、姉は松山東雲高等女学校専攻科英語科二年に進級するつもりでしたが、希望者が一人だけで、西村郁夫校長先生から、進学をあきらめて幼稚園を手伝ってくれないかという話があり、石手川幼稚園に就職しました。姉に会いにこの幼稚園を訪ねたところ、宣教師の残していった人形の家や英語の絵本など、魅力的なものがいっぱいあって、私もぜひ幼稚園へと願うようになりました。

その年度は欠員がなく、専攻科に保育科がこの時一回だけ設けられ、保育者志望を喜んでくださっていた清原先生のもとで一年間学び、実習で通っていた女学校付設勝山幼稚園で働き始めたのです。

最初のクラスの子どもたちから学んだこと

◇その子の思いを大切に

重夫ちゃんは始終机や窓に乗ってしまいます。そのたびに注意していたら、主任の和田先生が、「叱られている重夫ちゃんの顔をのぞいてごらんなさい、うれしくてよだれを垂らして笑っていますよ」とのこと。つまり、私が重夫ちゃんと接するのは抱っこして窓から下ろす時だけだったのです。そうしてもらいたくて乗ることに初めて気づかされ、行動を見るのではなく、その時の子どもの気持ちをくみ取る大切さを教えられました。

そして重夫ちゃんは「もうすぐ幼稚園おしまいだねえ」と、ただ一人、名残を惜しんでくれたのです。見送る視線を感じながら、一度も振り向かず、うつむいて門から去っていった後ろ姿が忘れられません。

◇子どもがリーダーシップをとる機会を

子どもを帰した後、一緒に保育科を卒業した橋本さんと二人で、その日の子どもについて話し合い、個人別の記録をつけていましたが、何をしていたか、いつも思い出せない女児がいました。忘れずに次の日にその子に近づくと、「山へ行って草とってこよう」と駆け出します。慌てて追いつくと、「部屋の布団も」と保育室へ入ってしまうのです。思い出せないわけで、保育者の居ない所を選んで遊んでいたのです。

保育者が遊びをおもしろくしようとして、つい夢中でリーダーシップを取ってしまい、子どもがリードする機会を奪っていたのです。

◇子どもと共に創り出す活動を

勝山幼稚園の保育は、朝ひとしきり自由に遊び、トライアングルが鳴ると保育室に入って、手洗いや

排泄、歌などで落ち着いてから遊戯室へ集まります。年長組十八人、年少組十二人、新任二人で担任した一年保育三十人の計六十人が円形に座り、サークルと呼ばれた活動に入ります。礼拝の後、歌やゲーム、ダンスなどをしますが、司会は主任と五年目の富田先生、新任も奏楽は交替で担当しました。先輩のピアノがとても美しいので、新任の時は子どもが心配そうに見守り、楽譜でも落とそうものなら飛んできて拾ってくれました。

サークル活動は説明したり教えたりしなくても年長児を見習って自然に覚え、異年齢の和やかな交流の場でもありました。入園式の朝は大雨で、楽しみにしていたぶらんこなどが使えず困っていた時、主任の和田先生が「保育科で習ったゲームを」と言ってくださり、私が始めた時も年長児がすぐ仲間入りして盛り上げてくれました。

サークルが終わると、保育室で製作したり外で遊んだりして帰宅前に絵本などを楽しみます。

十一月に保育室で菊の花をあしらった手提げを作っていた時、常雄ちゃんが「先生、わかったよ、白い菊をこっちに貼って、黄色い菊をここに貼るんでしょう?」と言って自分の額に菊を貼って「あらよっ!」と踊りだし、クラス全員が踊りだしてしまいました。保育者が準備して与えるのではなく、相談しながら共に創り出す活動を望んでいたのです。

常雄ちゃんは、友達がけんかをしていると、にこにこ笑いながら、「汝ら互いに相愛すべし」と、礼拝で覚えた聖句を涼しげな声で口ずさんで、その場を和ませる子どもでした。

戦争が烈しくなって

◇ままごとをやめて戦争ごっこを

一九四四年に講習会で、監視している軍人の前で講師が「今はままごとをしている場合ではない。組

を小隊、学年を中隊、園全体を大隊に組織して戦争ごっこを」とか「ぶらんこや滑り台は惰性で動く安易な遊具だ。自力で動く鉄棒や棒投げに切り替えなさい」と話されたのです。この時、ただ一人、親愛幼稚園の宇都宮先生が立ち上がって、ままごとが子どもにとって、いかに大切かを唇を震わせながら力説なさり感動しました。

◇海の見える所まで登る楽しさを奪われて

園の裏庭はお城山につながっていて、竹やぶをよじ登ると、はるかかなたに瀬戸内海の青い海が見晴らせました。「海が見えるまで」を合言葉に子どもたちとよく登ったものです。ところが一九四五年にそこに陸軍が横穴式の防空壕を勝手に掘り始め、楽しみがいっぱいあった裏山は立ち入り禁止になりました。ただでさえ警報の鳴るたびに避難して遊びが中断していたのに、庭が工事現場になってしまい、七月末の空襲で園舎が焼失、廃園に追い込まれてしまいました。職場も自宅も焼かれて、静岡に嫁いだ姉の家に親子三人で移りました。

戦後の伸びやかな雰囲気の中で

静岡では、父に英語を習ったり、アメリカ文化センターで、心理学や幼児教育の本や雑誌などを読んだりしていました。その楽しさが忘れられず、三十六歳で国際基督教大学に入学し、比較教育を学びました。

一九四七年に教育使節として来日していたヘファンナンの講習会が静岡でもあり、オブザーバーで出席しました。安定感とか自発性という言葉がたびたび使われ楽しい内容でしたが、陪席している進駐軍の前で「私の園では英語を教えています」という発言があり、「私の園でも」と何人かが続きました。戦争中、軍人の前でただ一人反論なさった宇都宮先

生を思い出し、挙手して反対を表明したのですが、理由を考える暇もありません。一九三八年にメリル先生に初めて英語を習った時、「ポチヨネエ」と言われたら名前を言っていたのを思い出し、当時は「ホワット　イズ　ヨワネイム」と片仮名の発音が多かったので、そんな発音で教えるのは問題だと発言し、賛成の拍手をもらいました。

再び保育者に

静岡女子師範学校に勤めていた義兄が病没し、親しくしていた同僚が附属幼稚園の園長だったので、未亡人の姉が採用されました。が、一年後に姉がタイピストに転じ、後任が見つかるまでという約束で私が入り、そのまま通算三十二年も勤めることになりました。

一九四八年には保育要領が出ていて、楽しく園舎の図面を見ていましたが、現実は広い焼け跡の隅に十八坪の保育室が二つと物置だけでした。担任した年少組は、職員室と教材置場も兼ねていてついたてもなく、園長や主任のすぐ目の前の保育で、動的な活動の時は窓から軒下へ机を出していました。そんな中でも窮屈とも思わず保育が楽しめたのは、勝山幼稚園の経験があったからだと思われます。

最初の二年余りで育てていただいたもの

主任の和田先生には保育科から引き続き教えていただきましたが、新任の思いも尊重してくださいました。実習の時、友人と批判していた歯ブラシやコップの収納を、新任二人でさっそく改善して木の箱で戸棚を作りました。しかし、それまでの竹かごのほうが手間がかからず清潔だったので、元の方法に戻したいと申し出た時、先輩の先生が、さもおかしそうに声を上げて笑っておられました。内心どうかと危ぶみつつ、温かく新任の思い付きを見守ってい

てくださったのです。

ぶらんこに心ゆくまで乗ってみたいという二人の願いも即刻聞き届けられ、午後の誰もいない園庭でふらふらになるまで乗って遊んだこともありました。静岡でも、東京の東洋英和幼稚園でも六十四歳まで伸びやかに保育ができたのは、そのお陰です。

宣教師が残したＪＫＵ（日本幼稚園連盟）の園報告の中に勝山幼稚園の一九一六年から二一年までの記録や写真があり、懐かしい園舎や園庭に五十五年ぶりに再会しました。その記録によると一九一五年、託児所として創立、貧困な家庭が大半ですが、

母親だけでなく父親も会合に参加し、入学後は皆生き生きと活発に育ち、地域とのつながりも大切にして、孤児院の子どもを招いて楽しく食事したり贈り物をしたりしています。

私も干してあるおしめをくぐって家庭訪問したことを思い出しましたが、他方、美しい西洋皿があってひな祭りに母親の手製のちらし寿司で会食したり、高下駄やお釜などの日本文化特有の玩具のコレクションもありました。ひさしをつける代わりにと宣教師が庭の真ん中に庭漆の木を植えたそうで、夏は大木の葉陰の下で遊び、冬には葉を落とし、実も実って、人工のひさしより経費もかからず、自然にも親しめました。

こうした物心ともにすぐれた、豊かな伝統ある園で、温かく最初の二年余りを育てていただいたことを深く感謝しています。

（元東洋英和幼稚園長）